

# 1泊100万円 気分はお殿様

大洲市の大洲城で来春から、天守に一般の人が宿泊できる「キャッスルステイ」が始まる。鉄砲隊による歓迎や伝統芸能の鑑賞、豪華な食事などVIP待遇が受けられ、1組につき1泊100万円から。海外の富裕層などを観光に呼び込むねらいがある。



加藤貞泰に扮した城主役による入城。宿泊客も同様の体験ができる

## 大洲城で市が来春から「城泊」

市は、中心部の町家や古民家をホテルなどに改修し、城下町を地域の観光拠点として売り出す構想を進めている。キャッスルステイはその「目玉」となる。売りは、城主気分を味わえる体験型イベント。今月8、9日



歓迎の祝砲を放つ大洲藩鉄砲隊。いずれも大洲市

## 海外の富裕層ねらい 豪華待遇

にあった実証実験では、大洲藩主・加藤貞泰に扮した城の職員が白馬に乗って入城。大洲藩鉄砲隊による祝砲などで歓迎を受けた。

天守前では、地元の保存会が市の伝統芸能「河辺鎮繩神楽」を披露。国重文の高欄櫓では、脇川あらし観光大使で演歌歌手の五代夏子さんが、伊予牛や大洲米など地元食材を使ったデザートを味わった。寝室は天守1階に設けられる。

内閣府や観光庁の担当者も訪れた。政府は「城泊」をインバウンド（外国人旅行者）向けに各地で展開するよう呼びかける。長崎県の平戸城でも来夏から城泊が始まる予定。観光庁の河田敦弥・観光資源課長は「城は外国人に訴求力がある。城下町全体の活性化を図る大洲城が城泊の先進事例になることを期待したい」と話す。

実証実験は、城の価値を損なわずに事業を運営できるかを確かめる意味合いもあった。市と連携協定を結び事業を運営する「パリューマネジメント」（大阪市北区）の他力野淳社長は「お城の姿はそのままの形で後世に残す」と強調。城は改修しない方針で、トイレは専用のト

イレカーを城に横付けする。入浴施設は今後、二の丸を整備する。気温を考慮し、宿泊受け付けは春と秋に年間30日を上限にするという。

### 「市の象徴」指摘も

現在の4層の木造天守は2004年に再建された。総工費13億円のうち5億2千万円は全国からの寄付でまかされた経緯がある。村上常雄市長は「城はみんなで眺める市の象徴。一部の人がお金を払って好きに使っていいの」と指摘。「市には次世代に城の価値を伝える教育にも取り組んでほしい」と注文をつける。

10月末に首里城（沖縄県）で火災があり、防火対策も課題の一つ。大洲城では宿泊者に禁煙を徹底し、宿泊時は夜間に常駐のスタッフが見回るといふ。

市の村中元・観光まちづくり課専門員は「城や城下町を残すことが一番。人口減少が進んだときに維持費を確保するには、文化財の活用の幅を広げるチャレンジをしないとけない」と話す。キャッスルステイは来春4月をめどに開始予定。（照井琢見）